

ファミリーホームの設置事例(乳児院連携事例)

<ホーム名 : 二葉乳児院>

1. 乳児院の基本情報

- (1)法人名 社会福祉法人 二葉保育園
- (2)設置主体 社会福祉法人 二葉保育園
- (3)認可定員 40名
- (4)併設施設 地域子育て支援センター二葉
- (5)住所 東京都新宿区南元町4番地

2. ファミリーホームの基本情報

- (1)定員 6名
- (2)住所 〒194-0043 東京都町田市成瀬台3-8-8 ホームばあばぱ
- (3)ホーム内



3. 乳児院とファミリーホームの建物配置、概要

(1) 乳児院とファミリーホームと関係機関との位置関係

- ・ファミリーホームと当法人が運営している乳児院(新宿区)の間は、約15km離れている。
- ・所管児童相談所は3、4か所であるが、ファミリーホームから30分～1時間圏内にある。

(2) 乳児院の概要

〒160-0012 東京都新宿区南元町4番地

児童定員 40名 認可 昭和23年1月1日 職員数 52名

0歳から概ね2歳、必要に応じて就学前までの様々な事情があって家庭で生活することが難しい乳幼児を養育している。新宿区、中央区、墨田区子どもショートステイ事業として、病気、出張、出産、介護、冠婚葬祭などで一時的に子どもの保育に困ったときに7日間以内で保育を行う。

4. 乳児院とファミリーホームが連携した経緯

(1) 連携に至った経緯

東京都の養育家庭センターを乳児院として開設していた時期(昭和61年～平成13年)に、研修時に里親さんの関わりを見ていたセンター長が、乳児院にいる里親委託の予定の子どもの委託をお願いしたいとなった関係から始まった。

3歳前の段階から交流を開始して、宿泊を中心の交流を3回ほど重ねて、委託。その後も1年ほどして、1歳違いの子どもを委託していった。当乳児院からは2名委託。連携を開始した動機・目的といったものは、乳児院のアフターケア関係のつながりであったが、0歳から育てていた子どもと養育者の関係を大切に考えていただいた双方の意思で進んでいった。里親さんの不安感を受け止めながら、子どもを中心においた考えが双方にあったと思う。

幼稚園の卒園、小学校の入学式、中学校の入学式といったイベントはもちろんのこと、年賀状など、忙しい折のFAXでのやりとりなどで関係性を継続している。

(2) 具体的に連携を進めるための方法と他の関係機関との連携手順

里親認定の研修や、学習会などでの里親さんを知っていくことが大切なことであると思う。今ケースの場合は、まず出会った場で、この里親さん宅にこの子どもをと思ったところが始まりであり、各都道府県が里親登録を請け負っている今の形からすると、乳児院側としては、あまりない例ではないか。今後、乳児院を活用した研修や学習会の場で直に触れあえること

ができていけば、十分可能性はあることだとは思う。

乳児院側では、アフターケアの形で家庭に帰ったケースや、児童養護施設に措置変更になったケースも含めて、取り組んでいるところはある。

養育の連続性や子どもの育ちの保障も含めて、関係性の財産として施設側を活用していただきたいと願っている。

現在の乳児院では、里親支援専門相談員の配置なども進んでいるので、連絡のやりとりや訪問支援は十分可能だと思う。

児童相談所の子ども担当福祉司は、異動や配置変換などで変わる可能性があるが、施設の職員は長く勤めている。退職しても尚、気持ちの上では、関わりを持ち続けている。何より、施設との関係性が持てている。長く里親養育で子どもを見るファミリーホームの方が、育った乳児院と連携をして子どもの育ちを見守っていくことは大切なことである。

今ケースは、出産、育児休暇を経て職場に復帰した職員、施設長をはじめ、家庭支援専門相談員、里親支援専門相談員、里親支援機関事業といった施設の職員とファミリーホーム運営者との関係性が十分にできていたことから連携はスムーズであった。間に、児童相談所を置かずに、直接のやりとりが多い。

乳児院では、里親委託となるケースが年に数件ある。里親との交流時期、外泊までの時期、長期委託の時期、さらに委託を終えて、乳児院への措置が切れた後からの里親との関係づくりといった様々な時期に多くの職員が関わっている。里親が、初めて子どもと交流する時や子育てを行う中で不安や悩みが出てくるときに、施設の職員とともに乗り越えていく経験などが、関係性を深められる一因である。子どもの成長を共に喜びたいというファミリーホームの希望、そこででの生活を楽しみ、乳児院の職員に報告をしたいという子ども側からの希望と、乳児院側の姿勢が重なったところで、成立するものかも知れない。

(3) 乳児院とファミリーホームの役割分担

乳児院は、赤ちゃんの施設になる。初めの土台作りになると思う。安全・安心の基本が作られて、里親さんへ委託をされる時には担当養育者と十分な関係性が形成されているところから、愛着対象者の移行が行われていく。子どもを支えるネットワークというか、育ちを見守っていく人たちが多ければ多いほど善き財産になると思われる。

交流時には、意識して里親さんの名前を伝えながら、子どもに存在を伝えていき、ファミリーホーム側としては、赤ちゃんだったころの話を折に触れて伝える中で大切にされていたことを伝えていただく。誕生日や進級、進学のお機会をとらえての連絡を行う。

生まれてからの人生において、大切にされている実感を得ることは、子どもにとってよいことである。ランドセルを背負っているのを見せに来たり、制服姿を見せてくれたり、喜びを分かちあう機会がある。

(4)連携を進めたことによる効果

乳児院側から見た効果としては、その子どもと思春期にかかる時期まで関係性を保つことができることは意義深い。職員の育成に役立つ。その理由は2年先までの養育でなく、長いスパンで子どもの育ちに関わることができるからである。職員のキャリア形成からすれば、子どもに長く関わっていくことができる仕事と感じられ、長期的な視野に立って仕事を重ねていくことができる。ひとりの人間の成長に喜びを感じることができるようになるといえる。

ファミリーホーム側から見た効果では、共に養育にあたってくれている存在を認識できる。根っこの部分で関わった職員と常に連絡が取れる状況にあることの心強さ。赤ちゃん時代を知り、交流の時の苦労や悩みを知っている人たちが身近にすることで、何でも話ができるという関係性があることは、日常の生活の中でも、声かけにしても、助かる存在である。

5. その他

乳児院からの委託を行う里親家庭、ファミリーホームに関して、子どもの育ち、育てを共有できるようにしていくためにも、里親養成の・育成の場に協力して、里親家庭・ファミリーホームを理解していく。初めのマッチングの部分にも関わらせていただくことができるとより良い。また、交流に関わることで、協働の子育てを行っていくことができる。

〔これから連携を考えている乳児院へのアドバイス〕

乳児院での子どもが、家庭に帰ることができずに、養育の場がファミリーホームに代わり、成長をしていくときに、その子どもの初めの部分を知っているのは、乳児院になる。乳児院がその大切な時期を次の養育者にバトンを渡すように、引き継いでいくことは必然である。家庭や里親家庭、ファミリーホーム、児童養護施設といった場に成長に沿って大切に育てられる所に変更していくことも乳児院では、必然である。

そう考えていくと、どこの部分でも連携は不可欠であり、しっかりとつないでいくことが、望まれる。子どもの育っていく過程の中で、折に触れて立ち返るところは、根っこの乳児院時代になることを考えていくと、多くの乳児院が取り組んでいる部分に自信を持って進めていくことだと思う。